

令和6年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第3号（7月予報）

令和6年6月25日 秋田県病虫害防除所

◇今回の予報対象期間は7月を主とします。次回の発表は令和6年7月30日の予定です。

◇病虫害発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。

<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>

◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>

◇病虫害発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトで読者登録できます。<https://www.e-komachi.jp/>

◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は、秋田県公式ウェブサイトで閲覧できます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病虫害防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	葉いもちの全般発生開始期はやや早い、発生量は平年並と予想されます。余り苗は直ちに処分し、余り苗や感染苗の持ち込みからの伝染を確認した場合は、速やかに防除してください。 斑点米カメムシ類の発生時期は早く、発生量が多いと予想されます。水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されるため、中・後期除草剤の使用にあたっては、発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な薬剤を選択してください。
大 豆	食葉性鱗翅目幼虫の発生量が多いと予想されます。防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布してください。
野 菜	病害では、きゅうりの斑点細菌病が多いと予想されます。予防散布に努めるとともに発病部位（葉、茎、果実）は早めに除去してください。 害虫では、ねぎ、トマトのアザミウマ類、きゅうりのアブラムシ類、えだまめの食葉性鱗翅目幼虫が多いと予想されます。発生初期から防除してください。
花 き	害虫では、きくのアブラムシ類、アザミウマ類の発生量が多いと予想されます。発生が見られたら薬剤を散布し、密度の低下を図ってください。
果 樹	病害では、りんごの斑点落葉病、褐斑病、なしの黒星病、ぶどうの灰色かび病が多いと予想されます。発病部位の摘み取りや薬剤防除を徹底してください。 害虫では、りんごのハダニ類が多いと予想されます。発生が多い園地では直ちに薬剤防除をしてください。また、ぶどうのクビアカスカシバについては防除対策情報第6号を参照し、粗皮剥ぎと薬剤防除をしてください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病（葉いもち）	全県	やや早い	－	平年並
	紋枯病	全県	早い	－	多い
	稲こうじ病	全県	やや早い	－	やや多い
	斑点米カメムシ類(第2世代) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	早い 早い 早い	多い 多い 多い	多い 多い 多い
	コバネイナゴ	全県	－	－	平年並
大 豆	ウコンノメイガ	全県	平年並	－	平年並
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
ねぎ (夏どり)	さび病	全県	－	やや少ない	平年並
	べと病	全県	－	平年並	平年並
	アザミウマ類(ネギアザミウマ)	全県	－	多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	－	やや少ない	平年並
きゅうり	べと病	全県	－	やや少ない	平年並
	うどんこ病	全県	－	平年並	やや多い
	斑点細菌病	全県	－	やや多い	多い
	アブラムシ類（ワタアブラムシ）	全県	－	多い	多い
キャベツ (初夏どり)	コナガ	全県	－	やや少ない	平年並
	モンシロチョウ	全県	－	平年並	やや多い
	ヨトウガ（第1世代）	全県	－	平年並	やや多い
トマト	葉かび病	全県	－	平年並	やや多い
	すすかび病	全県	－	－	やや多い
	灰色かび病	全県	－	やや少ない	平年並
	アザミウマ類（ヒラズハナアザミウマ）	全県	－	多い	多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	－	やや多い	多い
きく	白さび病	全県	－	平年並	やや多い
	アブラムシ類（ワタアブラムシ）	全県	－	やや多い	多い
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ、 ミカンキイロアザミウマ)	全県	－	多い	多い
	ハダニ類 (ナミハダニ、カンザワ ハダニ)	全県	－	－	平年並
りんどう	葉枯病	全県	－	平年並	やや多い
	リンドウホソハマキ	全県	－	やや少ない	平年並
	ハダニ類（ナミハダニ）	全県	－	やや少ない	平年並
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	－	－	多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや多い	多い
	黒星病	全県	—	平年並	やや多い
	炭疽病	全県	—	—	やや多い
	輪紋病	全県	—	—	やや多い
	褐斑病	全県	—	多い	多い
	シンクイムシ類（モモシンクイガ）	全県	—	—	やや多い
	ハダニ類 （ナミハダニ、 リンゴハダニ）	全県	—	多い	多い
	果樹カメムシ類 （クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ）	全県	—	やや少ない	平年並
	キンモンホソガ（第2世代）	全県	—	平年並	やや多い
な し （日本なし）	黒星病	県北部・県中央部	—	多い	多い
	黒斑病	県北部・県中央部	—	平年並	やや多い
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	やや多い
	シンクイムシ類（モモシンクイガ）	県北部・県中央部	—	—	平年並
	ハダニ類 （ナミハダニ、 リンゴハダニ）	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
	果樹カメムシ類 （クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ）	県北部・県中央部	—	やや少ない	平年並
ぶどう	べと病	県南部	平年並	平年並	やや多い
	灰色かび病	県南部	—	やや多い	多い
	晩腐病	県南部	—	平年並	やや多い
	アザミウマ類 （チャノキイロアザミウマ）	県南部	—	平年並	平年並
	クビアカスカシバ	県南部	—	—	やや多い
飼料作物	アワヨトウ（第1世代幼虫）	全県	—	—	やや少ない

Ⅲ．発生予報と防除対策

A 水稻

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発生時期（全般発生開始期）	発 生 量
1 いもち病（葉いもち）	やや早い（前年よりやや遅い）	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。

イ B L A S T A M法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、６月23日までに全県的な全般発生をもたらす感染好適な条件は訪れていない（±/±）。

ウ ６月３～４半旬の余り苗調査における発病地点率は、県北部０％（平年6.3％）で低い、県中央部０％（平年5.3％）でやや低い、県南部０％（平年2.3％）で低い、全県平均は０％（平年4.5％）で低かった（－/－）。

エ 病斑増加状況調査では、６月18日までに病斑増加は認められていない（±/±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、７月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。

イ 余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意する。

ウ これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり２kg、又はルーチン粒剤を10a当たり１kgを散布する。

エ 余り苗や感染苗の持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤又はノンプラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 紋枯病	早い（前年並）	多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。

イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は多いと推定される（－/+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15％を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかで防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。

イ 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使用していないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤は出穂15～5日前である。

ウ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後４～５日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後７日間は落水、かけ流しはしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3 稲こうじ病	やや早い（－）	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。
- イ 前年収穫期の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 前年多発したほ場では出穂20～10日前に、ドイツボルドーA、ボルドー、トライフロアブル、Zボルドー粉剤DL、モンガリット粒剤のいずれかを散布する。
- イ ドイツボルドーA、ボルドーは高濃度で散布すると薬害を生じやすい。
- ウ Zボルドー粉剤DLは高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する。
- エ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 斑点米カメムシ類（第2世代） （アカスジカスミカメ） （アカヒゲホソミドリカスミカメ）	早い（前年並） 早い（前年並） 早い（前年並）	多い（前年より多い） 多い（前年より多い） 多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/±）。
- イ 牧草地すくい取り調査（3地点）における越冬世代成虫の初確認日の平均は、アカスジカスミカメ（以下、アカスジ）が5月27日（平年6月8日）、アカヒゲホソミドリカスミカメ（以下、アカヒゲ）が5月14日（平年5月26日）でいずれも早かった（－/ ）。
- ウ 6月2～3半旬の巡回調査（40地点）における畦畔でのアカスジのすくい取り数は2.2頭で過去3か年平均の1.2頭より多く、発生地点率は33.3%で同26.5%よりやや高かった（ /+）。アカヒゲのすくい取り数は1.1頭で同0.3頭より多く、発生地点率は25.5%で同13.7%より高かった（ /+）。
- エ 予察灯（6地点）における6月3半旬までの総誘殺数はアカスジで300頭（平年28.7頭）で多く（ /+）、アカヒゲで52頭（平年37.8頭）でやや多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 6月20日発表の防除対策情報第7号を参照して防除する。
- イ 水田内に雑草が多発すると、アカスジの水田内への侵入が助長される。そのため、発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 コバネイナゴ	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 前年乳熟期の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される（ /－）。
- ウ 6月2～3半旬の巡回調査（40地点）における畦畔のすくい取り数は6.3頭で過去3か年平均

の5.6頭並、発生地点率は51.3%で過去3か年平均の64.1%よりやや低かった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア 要防除密度は株当たり0.5頭以上（穂ばらみ期まで）であり、これは本田における20回のすくい取りで100頭以上に相当する。要防除密度に達したほ場では、若中齢期の7月上～下旬にトレボン粉剤DL、トレボン乳剤、トレボンEWのいずれかを畦畔を含めて散布する。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
褐色菌核病	—	—	やや少ない	紋枯病との同時防除が可能である（モンセレン剤を除く）。
白葉枯病	—	—	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。
コブノメイガ	—	—	—	6月3半旬までに飛来は確認されていない。今後の予察情報に注意する。
セジロウンカ	—	—	—	6月23日現在、飛来は確認されていない。成虫飛来盛期の約21日後が防除適期となるので、今後の予察情報に注意する。
フタオビコヤガ （イネアオムシ） （第2世代）	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ （第1世代幼虫）	—	やや少ない	やや少ない	6月21日現在、飛来は確認されていない。今後の予察情報に注意する。

B 大豆

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ウコンノメイガ	平年並（前年より遅い）	平年並（前年より少ない）

（1）予報の根拠

- ア 予察灯（6地点）において6月3半旬までに誘殺は確認されていない（±/ ）。
- イ 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

- ア 生育が旺盛なほ場で多発する傾向があるので注意する。
- イ 7月6半旬には場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上の場合には、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤、プレバソンプロアブル5のいずれかを散布する。
- ウ 発生源となる成虫は長距離移動による飛来・侵入が主であり、急激に発生量が増加する場合があるので、今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ６月中旬のえだまめの巡回調査における発生茎率は6.6%（平年7.5%）で平年並、食害茎率は38.6%（平年24.6%）でやや高かった（ /+）。
- ウ 予察灯（６地点）における５月１半旬～６月３半旬のツメクサガの総誘殺数は８頭（平年1.6頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 さび病	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ６月４半旬の巡回調査における発病株率は０%（平年1.1%）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早まるので、予防や発病初期の防除に努める。
- イ 発病が多くなってからでは防除効果が劣るため、発病初期からアミスター20フロアブル（RACコード：11）、オンリーワンフロアブル（同：３）、カナメフロアブル（同：７）などを散布する。
- ウ RACコードが３、７、11の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 べと病	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ ６月４半旬の巡回調査における発病株率は０%（平年1.2%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 降雨が続くと発病しやすく、被害の拡大が早いため、発病が見られる前からオロンディスウルトラSC（RACコード：49・40）、プロポーズ顆粒水和剤（同：40・M5）、リドミルゴールドMZ（同：４・M3）などを散布する。
- イ RACコードが４、11、27、40、45、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月4半旬の巡回調査における食害株率は22.8%（平年7.7%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（同：4A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ネギハモグリバエ	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月4半旬の巡回調査における食害株率は0.4%（平年5.6%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、グレーシア乳剤（同：30）、ダブルシューターSE（同：5・未）、ダントツ水溶剤（同：4A）、ディアナSC（同：5）、ファインセーブフロアブル（同：34）、ベネビアOD（同：28）などを茎葉散布、又はダントツ粒剤（同：4A）、プリロッソ粒剤オメガ（同：28）、ミネクトデュオ粒剤（同：28・4A）を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統（バイオタイプB）の発生が確認されているほ場では、防除を徹底する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

5 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
アブラムシ類 (ネギアブラムシ)	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場はないと見込まれる。

D きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	－	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /＋）。

イ ６月４～５半旬の巡回調査における発病株率は０％（平年０.８％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 敷きわらなどを行い、雨による土のはね上りを防ぐ。

イ 発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル顆粒水和剤（同：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、リドミルゴールドMZ（同：4・M3）などの治療効果がある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

オ RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 うどんこ病	－	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /＋）。

イ ６月４～５半旬の巡回調査における発病株率は０％（平年０％）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、トリフミン剤（同：3）、パルミノ（同：M10）、ポリオキシシンAL水和剤（同：19）などの治療効果のある薬剤を葉の表裏にかかるとように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 斑点細菌病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /＋）。

イ ６月４～５半旬の巡回調査における発病株率は４.８％（平年２.６％）でやや高かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 強風などにより傷が付くと感染しやすくなるので防風対策を講じる。

イ 過剰な追肥をしない。また、過繁茂を避け、通風を改善する。

- ウ 発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- エ 銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。
- オ 降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 6月4～5半旬の巡回調査における発生株率は20.8% (平年16.7%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ ウイルスの伝染を防ぎ、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。
- ウ 定期的にモスピラン顆粒水和剤 (R A Cコード : 4A) 、コルト顆粒水和剤 (同 : 9B) などを茎葉散布する。
- エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一 R A Cコードの薬剤は連用しない。

E キャベツ (初夏どり)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 コナガ	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 能代市防除適期決定ほのフェロモントラップにおける6月1～4半旬の誘殺数は126頭 (平年143.7頭) で平年並だった (/±)。
- ウ 6月2半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0.02頭 (平年0.08頭) でやや少なかった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 幼虫が見られる場合は、収穫前日数に注意してアフーム乳剤 (R A Cコード : 6) 、ディアナ S C (同 : 5) 、コテツフロアブル (同 : 13) 、フェニックス顆粒水和剤 (同 : 28) 、プレバソソフロアブル5 (同 : 28) 、プロフレア S C (同 : 30) などを散布する。
- イ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一 R A Cコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 モンシロチョウ	—	やや多い (-)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ 6月2半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0.0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ヨトウガ (第1世代)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。

イ 6月2半旬の巡回調査における株当たり幼虫数は0頭 (平年0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア コナガとの同時防除に努める。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉かび病	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。

イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 潜伏期間が2週間と長いので、発病前からゲッター水和剤 (R A Cコード : 1・10) 、ダコニール1000 (同 : M5) 、ベルコート水和剤 (同 : M7) などを散布し予防に努める。

エ 耐性菌の出現を回避するため、R A Cコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 すすかび病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0% (前年0%) だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 多湿時に発生しやすいので、過度のかん水を避け、ハウス内の換気に努める。

イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ 潜伏期間が2週間と長いので、発病前からダコニール1000 (R A Cコード : M5) などを散布し予防に努める。発病が確認されたらニマイバー水和剤 (同 : 10・1) 、ファンベル顆粒水和剤 (同 : 11・M7) を散布する。

エ 耐性菌の出現を回避するため、R A Cコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 灰色かび病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ 6月中旬の巡回調査における発病株率は0％（平年0.5％）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ 発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ 発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ロブラール水和剤（同：2）、ベルクート水和剤（同：M7）などを散布し予防に努める。
- エ 耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 北秋田市防除適期決定ほにおける5月6半旬～6月2半旬の青色粘着板への誘殺数は153頭（平年47.6頭）で多かった（ /+）。
- ウ 6月中旬の巡回調査における被害果率は0.16％（平年0.01％）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。
- イ ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（同：5）、マツチ乳剤（同：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。
- ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

5 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 食葉性鱗翅目幼虫	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ６月中旬の巡回調査における発生茎率は6.6%（平年7.5%）で平年並、食害茎率は38.6%（平年24.6%）でやや高かった（ /+）。
- ウ 予察灯（６地点）における５月１半旬～６月３半旬のツメクサガの総誘殺数は８頭（平年1.6頭）で多かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブル、プロフレアＳＣのいずれかを散布する。

H きく

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 白さび病	－	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。
- イ ６月中旬の巡回調査における発病葉率は０%（平年0.0%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 発病葉は摘み取り、ほ場外で処分する。
- イ 発生してからでは防除が困難であるため、発生前からダコニール1000（ＲＡＣコード：M5）、カナメフロアブル（同：7）、ラリー乳剤（同：3）などを散布する。また、降雨などで発病が多くなると予想される場合は、３～４日間隔で散布する。
- ウ 耐性菌の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 アブラムシ類 （ワタアブラムシ）	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ ６月中旬の巡回調査における発生茎率は9.5%（平年6.0%）でやや高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
- イ ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するため、発生初期の防除を徹底する。
- ウ 発生初期から、ダントツ水溶剤（ＲＡＣコード：4A）、チェス水和剤（同：9B）、トランスフォームフロアブル（同：4C）などを散布する。
- エ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一ＲＡＣコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ、 ミカンキイロアザミウマ)	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は9.1% (平年1.2%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
イ 発生初期から、グレーシア乳剤 (RACコード: 30)、スピノエース顆粒水和剤 (同: 5)、
ファインセーブフロアブル (同: 34)などを散布する。
ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ハダニ類 (ナミハダニ、カンザワハダニ)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
イ 6月中旬の巡回調査における発生茎率は0% (前年0%) だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場周辺の雑草地は発生源となるので、除草に努める。
イ 発生初期から、グレーシア乳剤 (RACコード: 30)、コテツフロアブル (同: 13)、スター
マイトフロアブル (同: 25A)などを散布する。
ウ 抵抗性害虫の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤は連用しない。

I りんどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 葉枯病	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
イ 6月中旬の巡回調査における発病茎率は7.5% (平年5.8%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 過剰な追肥を控え、過繁茂を避ける。
イ オンリーワンフロアブル、ベフラン液剤25などを散布する。ただし、花の汚れを避けるために
オーソサイド水和剤80やZボルドーは着蕾期以降に使用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 リンドウホソハマキ	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ６月中旬の巡回調査における被害茎率は0.1％（平年0.3％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害を見つけたら折り取り、土中に埋めるなど適切に処分する。
- イ ほ場をよく観察し、成虫又は潜葉痕及び食害痕が認められたら、アディオフロアブル、ディアナＳＣ、フェニックス顆粒水和剤などを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 ハダニ類（ナミハダニ）	－	平年並（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ ６月中旬の巡回調査における発生茎率は0.9％（平年1.5％）でやや低かった（ /－）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア カネマイトフロアブル、コロマイト水和剤、バロックフロアブルなどを散布する。ただし、マイトコーネフロアブルの使用時期は開花前までのため注意する。

J 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 オオタバコガ	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

- ア 向こう１か月の気温は高いと予報されている（ /＋）。
- イ 防除適期決定ほ（３地点）における５月４半旬～６月３半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は27頭（平年4.6頭）で多かった（ /＋）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 施設栽培だけではなく、露地栽培の野菜・花き類で食害が見られているので、ほ場の発生状況をよく確認する。
- イ ６月６日発表の防除対策情報第４号を参照して防除する。

K りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 斑点落葉病	－	多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ６月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.2%（平年0.1%）でやや高く、同地点率は30.0%（平年14.4%）で高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病部位を除去し、園地外へ搬出して適切に処分する。

イ ７月上旬にパスポート顆粒水和剤など、７月下旬にダイパワー水和剤などを散布する。

ウ ポリオキシシンAL水和剤（RACコード：19）、ユニックス顆粒水和剤47（同：9）を使用する場合は保護殺菌剤に加用し散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、使用回数はそれぞれ１回とする。

エ ポリオキシシン剤耐性菌発現園では、連続降雨の前にベルクト水和剤、銅水和剤などの保護殺菌剤を主体に散布する。ポリオキシシン剤は使用せず、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を使用する。

オ ベフラン液剤25、ベフキノン水和剤は千秋、王林で７月上旬までの散布で果実色に障害を生じることがある。

カ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒星病	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ６月中旬の巡回調査における発病果そう率は4.4%（平年1.1%）で高く、同地点率は5.0%（平年12.0%）で低かった（ /±）。

ウ ６月中旬の巡回調査における発病果率は0.1%（平年0.1%）、同地点率は5.0%（平年6.6%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発病葉、発病果は見つけ次第、摘み取り、焼却する。

イ ７月上旬にパスポート顆粒水和剤など、７月下旬にダイパワー水和剤などを散布する。

ウ QoI剤（RACコード：11）を使用する場合は、必ず保護殺菌剤（オーソサイド水和剤80、有機銅剤など）を加用する。

エ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 炭疽病	—	やや多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 園地の近くにあるニセアカシアは伐採する。

イ 二次感染防止のため被害果は見つけ次第、摘み取って土中に埋める。

ウ 薬剤は約２週間間隔で散布するが、果実感染は６～７月が主体となるので、この期間が多雨と予想される場合は、散布間隔を短くする。

エ QoI 剤（RACコード：11）は原則、使用回数を２回とし、加用する保護殺菌剤としてベルクト水和剤、有機銅剤、チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤などを使用する。

オ ベフラン液剤25、ベフキノン水和剤は千秋、王林で７月上旬までの散布で果実色に障害を生じることがある。

カ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
4 輪紋病	—	やや多い（－）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 枝への感染は７月に多いため、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する。
なお、本剤の使用回数は３回以内である。

イ 薬剤は約２週間間隔で散布するが、果実感染は６～７月が主体となるので、この期間が多雨と予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前まで、ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤は収穫30日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 褐斑病	—	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ６月中旬の巡回調査における発病新梢葉率は0.03%（平年0.01%）、同地点率は20.0%（平年0.5%）でいずれも高かった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 密植や枝が重なった部分などに多発するので、不要な徒長枝を除去する。

イ 薬剤は約２週間間隔で散布するが、天候不順で冷涼、多雨が続くと予想される場合は散布間隔

を短くする。

ウ 多発が予想される場合は、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）又はオンリーワンフロアブル（同：3）を使用する。なお、同剤は耐性菌の密度増加が懸念されるので、必ず保護殺菌剤に加用し、1～2回以内の使用とする。

エ DMI 剤耐性菌が確認されている地域及びりんご黒星病防除にDMI 剤（RACコード：3）を使用した園では、褐斑病の防除にDMI 剤を使用しない。

オ パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、早生品種に散布する場合は注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（6地点）における6月1～4半旬のフェロモントラップへの平均誘殺数は15.7頭（平年14.6頭）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、6日以上おく。被害果の摘み取り及び水漬け処分は幼虫脱出前の7月上旬まで全園一斉に行い、その後は随時行う。

イ ピレスロイド系剤（RACコード：3A）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）などの殺卵剤を卵期間内に散布する。

ウ スミチオン水和剤40とパーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	多い（前年よりやや多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 6月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0.19頭（平年0.01頭）で多く、同地点率は10.0%（平年10.3%）で平年並だった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 発生の多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

イ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は1薬剤1回、かつ作用点が同一の殺ダニ剤の使用回数は1回として、効力低下を防止する。

ウ エコマイト顆粒水和剤とダニゲッターフロアブルは、同一RACコードのため注意する。

エ ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

オ オマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生することがあるので8月中旬以降に使用する。

カ 他の殺菌剤及び殺虫剤と混用する場合は次の点に注意する。

- ① コロマイト乳剤は、パスポート顆粒水和剤、ストライド顆粒水和剤及びスミチオン水和剤40と混用しない（葉の黄変、葉裏の褐変）。

- ② カネマイトフロアブルとアリエッティC水和剤を混用する場合は、先にカネマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。
- ③ マイトコーネフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にマイトコーネフロアブルを希釈する（凝集の回避）。また、マイトコーネフロアブルはスミチオン水和剤40と混用しない（黄変落葉）。
- ④ コテツフロアブルは、アリエッティC水和剤又はベフラン液剤25との混用で凝集が認められるので、攪拌しながら散布する。
- ⑤ ダニサラバフロアブルとアリエッティC水和剤又はカルシウム剤を混用する場合は、先にダニサラバフロアブルを希釈し、よく攪拌する（凝集の回避）。
- ⑥ スターマイトフロアブルとアリエッティC水和剤又はベフラン液剤25を混用する場合は、先にスターマイトフロアブルを希釈する（凝集の回避）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 防除適期決定ほ（6地点）における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は7.0頭（平年27.5頭）でやや少なかった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
- イ 園内への飛来が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤のいずれかを散布する。
- ウ スミチオン水和剤40は、高温時や衰弱樹に散布しない（黄変落葉）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9 キンモンホソガ（第2世代）	—	やや多い（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 6月中旬の巡回調査における食害葉率は0.1%（平年0.1%）、同地点率は20.0%（平年18.0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

- ア 被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。
- イ 発生が多い園地において、県北部では7月2～3半旬頃、県中央部・県南部では7月1～2半旬頃にネオニコチノイド系剤（RACコード：4A）、ピレスロイド系剤（同：3A）、有機リン系剤（同：1B）などを散布する。

10 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
ハマキムシ類	—	やや少ない	やや少ない	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

L なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 黒星病	—	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ６月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.2%（平年0.1%）で高く、同地点率は20.0%（平年14.5%）で平年並だった（ /+）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 病斑部を切除し、園外へ搬出し処分する。腋花芽利用率の高い園では芽基部病斑が多い傾向があるので注意する。

イ オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80を10日ごとに散布する。

ウ 多発条件下（天候不順）での散布間隔は7日とする。幸水は果実発病が多いので特に注意し、7月末まで念入りに防除する。また、有袋栽培の場合は必ず防除剤を散布した後に袋をかける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 黒斑病	—	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア 向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ ６月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0.5%（平年0.8%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 県内で栽培されている品種では、南水、二十世紀、新水、八雲などで発生しやすい。

イ 枝病斑、枯死芽は伝染源になるので切除する。

ウ 落花期から袋かけまでが果実感染防止の重点時期であるため、薬剤散布後は袋かけが遅れないようにする。

エ オキシラン水和剤を10日ごとに散布する。降雨が続くと予想される場合や発病が認められる園地では散布間隔を7日とする。

オ 多発条件下では、ポリオキシシンAL水和剤（RACコード：19/未）を主剤に加用して散布する。耐性菌の出現を回避するため、本剤は3回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3 輪紋病	—	やや多い (－)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。幹や太枝は粗皮削りを行う。

イ キャブレート水和剤、オキシラン水和剤、オーソサイド水和剤80を10日ごとに散布する。降雨が続くと予想される場合は散布間隔を7日とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ 防除適期決定ほ (4地点) における6月1～4半旬のフェロモントラップへのモモシンクイガの平均誘殺数は6.0頭 (平年11.2頭) でやや少なかった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 被害果は摘み取り、その日のうちに水漬けし、6日以上おく。被害果の摘み取り及び水漬け処分は幼虫脱出前の7月上旬まで全園一斉に行い、その後は随時行う。

イ ピレスロイド系剤 (RACコード: 3A)、ネオニコチノイド系剤 (同: 4A) などの殺卵剤を卵期間内に散布する。

ウ スミチオン水和剤40とパーマチオン水和剤は、高温時や衰弱樹に散布しない (黄変落葉)。

エ モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない (葉裏に黒色斑)。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハダニ類 (ナミハダニ、リンゴハダニ)	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。

イ 6月中旬の巡回調査における葉当たり発生頭数は0頭 (平年0.01頭) でやや少なかった (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 徒長枝の切除、焼却を摘果終了までに行い、夏期の発生源を少なくする。

イ 7月上～中旬にカネマイトフロアブル (RACコード: 20B)、コロマイト水和剤 (同: 6)、ダニオーテフロアブル (同: 33)、ダニゲッターフロアブル (同: 23)、マイトコーネフロアブル (同: 20D) などを散布する。ただし、発生が多い園地では直ちに殺ダニ剤を散布する。

ウ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤の使用回数は1薬剤1回、かつ作用点が

同一の薬剤の使用回数は1回として効力低下を防止する。

エ イの薬剤を使用する際は、次の点に注意する。

- ① ダニゲッターフロアブルは、新梢伸長期の豊水、新高、長十郎で新葉に薬害（葉焼け、縮葉症状）を生じるおそれがあるので、これらの品種に散布する場合は7月下旬以降に使用する。
- ② ダニゲッターフロアブルは、新梢伸長期の日本なしで有機リン系剤との混用又は10日以内の近接散布で新葉に薬害（葉焼け、縮葉症状）を生じるおそれがあるので、散布しない。
- ③ コロマイト水和剤は高温・乾燥時の散布で、また、樹勢の弱っている樹で、葉に薬害（黄変落葉）を生じるおそれがあるので散布しない。
- ④ ダニオーテフロアブルを使用する園では、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない（銅剤と混用又は近接散布での防除効果の低下）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ、 チャバネアオカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 防除適期決定ほ（4地点）における6月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の平均誘殺数は20.0頭（平年34.0頭）でやや少なかった（ /-）。

（２）防除上注意すべき事項

ア 多発が予想される場合は、早めに袋かけを行う。

イ 園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数も場所によって異なることから、飛来状況をよく観察して防除する。

ウ 園内への飛来が多い場合は有機リン系剤（RACコード：1B）、ネオニコチノイド系剤（同：4A）、ピレスロイド系剤（同：3A）のいずれかを散布する。

M ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 ベと病	平年並 (前年よりやや遅い)	やや多い (前年よりやや多い)

（１）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（±/+）。

イ 6月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア ベと病は孢子が雨滴のはね上がりで伝搬するので、敷きわらを厚く敷いておく効果的である。

イ エトフィンフロアブル（RACコード：22）、ジャストフィットフロアブル（同：43・40）、フェスティバル水和剤（同：40）、ベトファイター顆粒水和剤（同：27・40）、ホライズンドライフロアブル（同：27・11）、ライメイフロアブル（同：21）、ランマンフロアブル（同：21）、レーバスフロアブル（同：40）、銅剤（コサイド3000、ムッシュボルドーDF、ICボルドー66D、Zボルドーなど）（同：M1）又は4-4式ボルドー液のいずれかを散布する。

ウ Q o I 剤（R A Cコード：11）、Q i I 剤（同：21）、カルボン酸アミド剤（同：40）を含む薬剤は使用回数を1～2回とし、同一R A Cコードの薬剤は連用しない。特に県南部ではQ o I 剤耐性菌が広範囲で確認されており、Q o I 剤の効力低下が見られる園もあることから、使用にあたっては十分注意する。

エ シモキサニル（R A Cコード：27）を含む薬剤及びエトフィンフロアブル（同：22）は、使用回数を1～2回とし、連用しない。

オ ボルドー剤（ムッシュボルドーD F、Z ボルドーなど）は袋かけ後に使用する。

カ キノンドーフロアブルは、果実肥大期（小豆粒大）以降の散布でサビ果や果房の汚れを生じるおそれがあるので、無袋栽培ではこの時期以降の散布は避ける。

キ ムッシュボルドーD F、Z ボルドー及びコサイド3000は、薬害（落葉）のおそれがあるので、クレフノン100倍を必ず加用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 灰色かび病	—	多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 6月中旬の巡回調査における発病葉率は0.3%（平年0.1%）でやや高かった（ /+）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 花冠、不受精果などの花器残さは成熟果での伝染源となるので、果粒肥大前（袋かけ前）に払い落とす。

イ 発病花穂や発病葉のほか、落葉や芽かきした枝葉も伝染源となるので焼却する。

ウ オーソサイド水和剤80（R A Cコード：M4）、オンリーワンフロアブル（同：3）、パスワード顆粒水和剤（同：17）、ピクシオD F（同：17）、ポリオキシシナール水溶剤（同：19/未）のいずれかを散布する。ただし、ポリオキシシナール水溶剤の使用時期は収穫60日前まで、オーソサイド水和剤80は収穫30日前までであるため、散布時期に注意する。また、オンリーワンフロアブルの散布時期は7月中旬までとする。

エ 上記薬剤のうちオーソサイド水和剤80以外の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため、同一R A Cコードの薬剤の使用回数を1回とし、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 晩腐病	—	やや多い（－）

（1）予報の根拠

ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（ /+）。

イ 開花直前期（5月下旬）の巡回調査における発病花穂率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア 発病果房、巻きひげや枝に残っている穂梗の基部は丁寧に取り、焼却するか土中に埋める。

イ 笠かけ、袋かけは発病抑制効果が高いので、できるだけ早く始め、遅くとも7月中旬までには終わる。

ウ オーソサイド水和剤80 1,000倍（R A Cコード：M4）又はオンリーワンフロアブル2,000倍液（同：3）を散布する。ただし、オーソサイド水和剤80の使用時期は、収穫30日前までなので注

意する。オンリーワンフロアブルは耐性菌の出現を回避するため、同一RACコードの薬剤の使用回数を1～2回とし、連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 アザミウマ類 (チャノキイロアザミウマ)	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/±)。
 イ 6月中旬の巡回調査における被害花穂・果房率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多い場合は、エクシレルSEやスカウトフロアブル、ダントツ水溶剤、テッパン液剤、ディアナWDG、バイスロイドEW、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。
 イ ダントツ水溶剤は小豆大期以降、モスピラン顆粒水溶剤やバイスロイドEW、ディアナWDG、テッパン液剤は大豆大期以降の散布で果粉溶脱を生じるおそれがあり、その前か袋かけ後に散布する。
 ウ エクシレルSEは果実に薬斑や果粉溶脱を生じるおそれがあるため、袋かけ後に使用する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 クビアカスカシバ	—	やや多い (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている (/+)。
 イ 防除適期決定ほ (2地点) における6月1～3半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は106頭 (平年77.0頭) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 6月14日発表の防除対策情報第6号を参照して防除する。

N 飼料作物

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1 アワヨトウ (第1世代幼虫)	—	やや少ない (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 6月4半旬までの糖蜜トラップ (2地点) における総誘殺数は0頭 (平年6.5頭) でやや少なかった (/—)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 本種は飛来性害虫であり、飛来数が急激に増加することがあるので、今後の予察情報に注意する。

IV. 気象予報

令和6年6月20日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（6月22日～7月21日）

（1）予報のポイント

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。
- ・ 東北日本海側では、前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

（2）向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

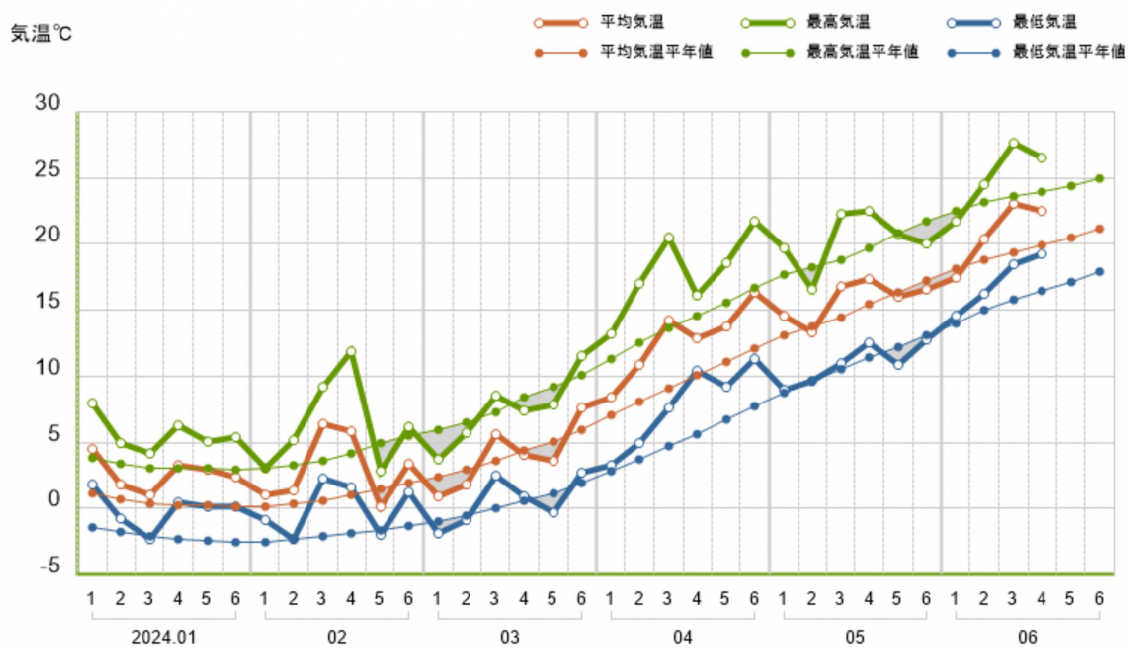
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	40%	30%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

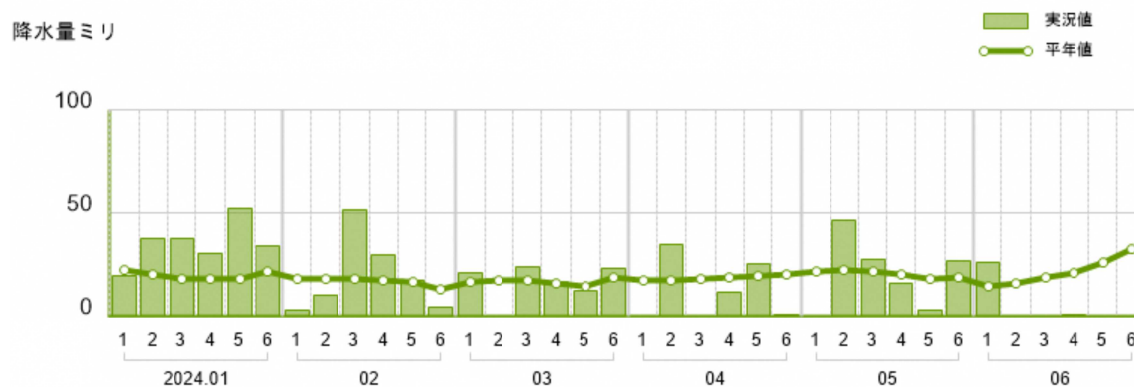
	低い	平年並	高い
6/22～6/28（1週目）	10%	20%	70%
6/29～7/5（2週目）	10%	20%	70%
7/6～7/19（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～6月4半旬 秋田県農業気象システムより)

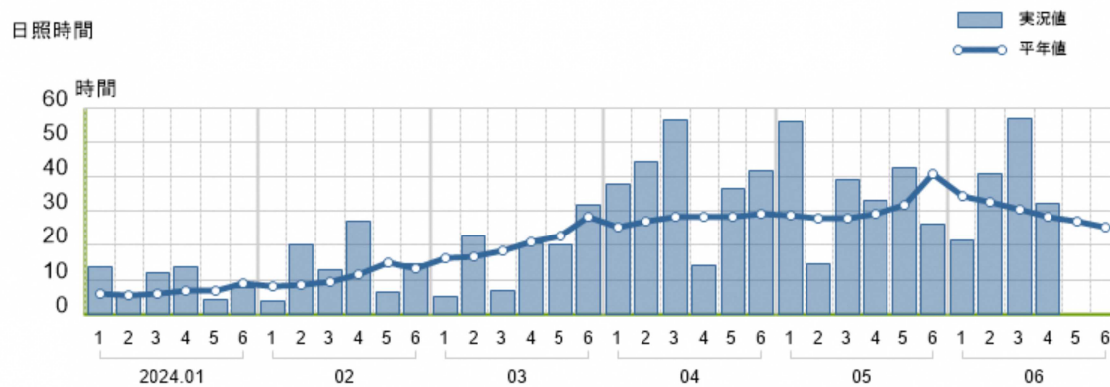
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生月日からの差を5段階評価で予測します。

日数	～ -6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生 日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「－」

予報内容の発生時期や発生量の「－」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「－」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「－」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40％で高い（多い）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解 説
高い(多い)確率が50%以上	高い(多い)
(20:40:40)	平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上	平年並
(40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

